



TITLE:

京大広報 No. 396

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 396. 京大広報 1990, 396: 975-982

ISSUE DATE:

1990-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209281>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 396

京都大学広報委員会



原猿類の1種ワオキツネザル（マダガスカル産） —関連記事本文 977 ページ—

目 次

<大学の動き>

京都大学留学生センター開設祝賀会…………… 976

TSS端末による研究室からの図書・雑誌

オンライン目録検索の開始…………… 976

京都大学秋季企画展 自然史資料・標本展の開催… 977

第1回京都大学自然史博物館設立推進委員会

公開講座—自然史研究へのいざない—…………… 978

<訃報>…………… 976

<紹介>

文学部哲学科…………… 979

<保健コーナー>

国際交流と輸入感染症…………… 980

<随想>

滋賀に移って

名誉教授 佐野 晴洋…………… 981

<コラム>

入試改革の落とし穴

教育学部教授 柴野 昌山…………… 982

＜大学の動き＞

京都大学留学生センター開設祝賀会

本年6月8日に開設した京都大学留学生センターの開設祝賀会が、9月12日（水）午後3時30分から、京都大学楽友会館において開催された。

祝賀会は佐野哲郎留学生センター長と西島安則総長の挨拶、文部省の齋藤秀昭留学生交流推進室長の祝辞に続いて、加藤幹太放射性同位元素総合センター長の発声による乾杯でパーティーが始まり、部局長、関係教官、事務（部）長、留学生など約100名が開設を祝い、午後5時30分頃閉会した。



祝辞を述べる齋藤文部省留学生交流推進室長

TSS 端末による研究室からの図書・雑誌オンライン目録検索の開始

附属図書館では、10月1日より標記の検索サービスを開始します。これは、研究室等の TSS 端末から附属図書館のホストコンピュータに接続して、本学に所蔵する図書・雑誌の目録をオンラインで検索するもので、利用は無料です。

検索できる目録データは、開始当初で図書18万冊（主として最近の受入分ですが、未入力部局もあります）、雑誌6万件で、順次新規分が入力されていく予定です。検索システムは大型計算機センターと同様の FAIRS-1 を使用しています。TSS 端末は、大型計算機センターに接続できるもので、日本語処理（JIS83）、KUINS 接続の可能なものを対象とします。

利用申込みができるのは、本学の教職員、大学院学生及びそれらに準ずる方々です。利用についての案内を各部局に通知しましたが、詳細は附属図書館のカウンターあるいは参考調査掛（2636）までお問合せ下さい。

（附属図書館）

計 報

島田 陽一 工学部助手

本学工学部助手 島田陽一先生は、去る9月16日逝去された。享年27。

先生は、昭和60年本学工学部卒業、昭和62年本学大学院工学研究科修士課程（情報工学専攻）修了、同4月本学工学部情報工学科助手に採用された。専門は、情報処理・人工知能。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（工学部）

京都大学秋季企画展

自然史資料・標本展の開催

京都大学自然史博物館設立推進委員会は、文学部博物館企画展示ホールを会場として、秋季企画展「自然史研究へのいざない」を下記のとおり開催します。本学の教職員・学生は無料です（身分証明書を呈示）。

記

期 間 平成2年10月22日(月)～12月8日(土)
ただし、一般公開に先立ち、本
学の教職員・学生には10月19日
(金) 午後3時から特別に公開し
ますので、多数ご観覧ください。

開館時間 月曜日～金曜日 9:30～16:30
土曜日 9:30～12:00
(入館は閉館30分前まで・日祝日は休館)

場 所 文学部博物館 企画・展示室(2F)

展示内容

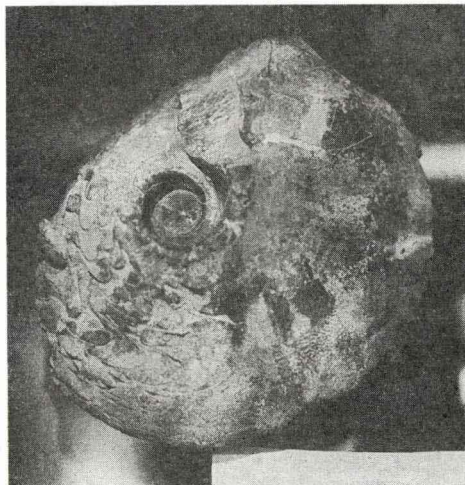
本学の理学、農学、薬学の各学部及び教養部並びに霊長類研究所、農学部附属植物生殖質研究施設には、200万点以上に及ぶ貴重な自然史資料・標本が収蔵されています。今回の展示には、これらの豊富な資料・標本のなかから最新の研究成果と関連した重要なものを厳選して、出品、展示・解説します。

展示は次の5つの分野に大別されます。(1)地球上の地殻・地層の形成と、古生物学的事実に基づく生物の進化史、(2)現存する植物と動物とに見られる精妙な相互適応と共存の世界、(3)日本列島における温帯植物相の成立史、(4)ニホンザルを含む類人猿の社会構造と人類の起原、(5)コムギの起原と資源植物として重要なさまざまな薬草に関する研究成果などを、多彩な標本・資料・写真などを駆使して解説します。また、京都府において絶滅に瀕している動物や植物の種にもスポットライトをあて、解説します。

(京都大学自然史博物館設立推進委員会)



アカシデの葉を切って巻くマルムネチョッキリ



シベリア・ベルホヤンスク地方の中生代の地層より産出したアンモナイトの1種オトセラスの化石

第1回京都大学自然史博物館設立推進委員会公開講座

— 自然史研究へのいざない —

平成2年10月22日～12月8日までの期間、本学文学部博物館企画展示ホールにおいて、京都大学秋季企画展として「自然史資料・標本展—自然史研究へのいざない」が開催されますが、本講座は、それらの展示と関連した4つのトピックスを選び、研究方法や研究の成果についてわかりやすく解説することを目指しています。

1. 開講日 平成2年11月10日・17日・24日・12月1日（毎土曜日 計4回）
2. 時 間 各回午後1時30分～午後4時00分
3. 場 所 文学部博物館3階講演室
4. 定 員 75名（申込が定員を超過した場合は抽選により決定します）
5. 受講料 3,290円（全講義を通しての受講料です）
6. 演題・講師

11月10日 花の自然史

理学部教授 河 野 昭 一

花をつける植物は、顕花植物と呼ばれるが、その進化の過程で生みだされた、多種多様な形や色彩、性の世界と昆虫を含む動物達との複雑にして精妙な共存の世界について語る。

11月17日 爬虫類の自然史

理学部助手 疋 田 努

カメ、ワニ、トカゲ、ヘビといった爬虫類の生活を紹介する。彼らは恐竜の末裔ではなく、鳥や哺乳類とは異なる方法で成功し、繁栄している動物である。

11月24日 石になった生きものたち—化石の世界—

理学部教授 鎮 西 清 高

化石には、巨大なもの、微小なもの、骨格や殻、足跡や巣孔など、様々ある。これらを紹介しながら化石になった生物たちの生活や環境、進化などを考える。

12月1日 コムギのふるさとを訪ねて

農学部教授 阪 本 寧 男

コムギは1万年前の新石器時代に西南アジアで栽培された。そのふるさとを訪ねて、祖先野生種の生態や分布、栽培コムギの伝統的な食べ方を紹介する。

7. 申込方法

1名につき1枚の官製往復はがきに次の事項を明記して、平成2年10月15日（月）までに着くようにして下さい。

- | | |
|------------|----------------|
| ① 氏名（ふりがな） | ② 住所・郵便番号・電話番号 |
| ③ 年齢・性別 | ④ 職業又は学校 |
| ⑤ 受講の動機 | |

8. 郵送先・問い合わせ先

〒606 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学部植物学教室 電話（075）753-4120

返信はがきで採否を連絡しますので、必ず郵便番号・住所・氏名を記入して下さい。

なお、決定通知を受けた方は、受講料を10月31日（水）までに郵便為替又は現金書留にて納付して下さい。

（京都大学自然史博物館設立推進委員会）

＜紹介＞

文学部哲学科

文学部哲学科の歴史は、1906年(明治39年)の文科大学(文学部の前身)開設とともに始まった。発足以来の歩みについては、『京都大学文学部五十年史』(1956)、『京都大学七十年史』(1967)等の既刊の資料に詳しいので重複を避けるが、当初の5講座から出発した哲学科は、いま16講座(他に大学院講座1)に達し、専任教官として、教授11名、助教授9名、助手12名のスタッフを有する(本年10月初現在)。文科大学が開設時より、哲・史・文の3学科編成として構想されたのは、清新な創意に出るものであった。現在の哲学科においても、たとえば、哲学哲学史第1～第6講座が、哲学、西洋古代・中世・近世哲学史、更にインド哲学史、中国哲学史をもって成ること、宗教学第1～第3講座が、宗教学と並んで、仏教学、キリスト教学を含むこと、いずれも特徴的といえよう。他方、心理学、美学美術史、社会学等の講座は、研究方法の進展に応じて、実験講座化されている。総じて、多様な専門領域への分化の流れに沿いつつ、同時に、広汎で総合的な視野を失うことなく、人間・社会・文化を考究してゆくところに、哲学科の伝統的な独自性があると思われる。

哲学科16講座は、11専攻を構成し、学部学生は後期2年において専攻に分属する。哲学科全体では、学部227名、大学院修士課程に67名、博士後期課程に90名の学生が在籍し、また研修員として研究を行っている者が41名いる。国際交流の活発化のなかで外国人学生も増加し、研究生・研修員を含めて27名にのぼる(本年5月1日現在)。一方、諸外国に留学する学生もあいついでいる。

以下、哲学科専任各教官の主な研究分野を、専攻別に紹介することとする。

○哲学 木曾好能教授は、イギリス経験論とくにヒュームの哲学、及び現代の分析哲学など。濱野研三助手は、クワインの哲学、現代の分析哲学。

○西洋哲学史 内山勝利助教授(古代)は、ソクラテス以前、及びプラトン、アリストテレスの

哲学。山本耕平助教授(中世)は、トマス・アクィナスを中心とする13世紀の盛期スコラ学。藪田坦教授(近世)は、ルネサンス期及び近世ドイツの哲学思想。金山弥平助手は、プラトン、アリストテレス、ヘレニズムの哲学。

○インド哲学史 徳永宗雄助教授は、リグヴェーダ神話、タミル語文献を併用した古典期ヒンドゥー教の研究。狩野 恭助手は、インド論理学。

○中国哲学史 内山俊彦教授は、戦国、秦漢、六朝時代等の思想史。池田秀三助教授は、漢代を中心とする経学(易学)の思想史的研究。坂内栄夫助手は、唐宋時代の思想・宗教史。

○心理学 平野俊二教授は、生理心理学(学習・記憶など)。清水御代明教授は、認知心理学(思考過程・連想など)。学阪直行助教授は、知覚心理学(視覚の情報処理など)。山口正弘助手は、生態学的生理心理学(視覚行動など)。塩坪いく子助手は、発達心理学(認知発達など)。

○倫理学 内井惣七教授は、分析倫理学、科学哲学、論理学。工藤 亨助手は、西田哲学。

○美学美術史学 清水善三教授は、日本古代・中世美術史とくに仏教美術史。佐々木丞平助教授は、日本近世絵画史。岩城見一助教授は、美学・芸術学と

くにドイツ観念論の美学。小林留美助手は、フランス美学・芸術学。安田篤生助手は、日本近世絵画史。

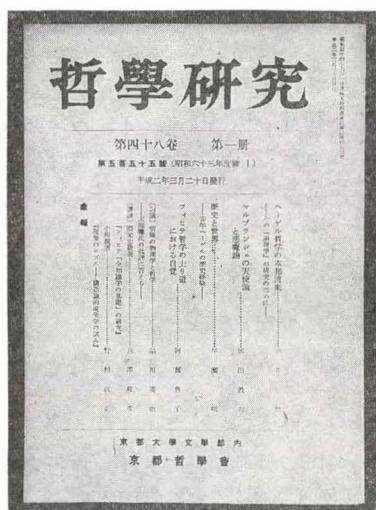
○社会学 中 久郎教授(社会学)は、社会学史・基礎理論、共同体論。筒井清忠助教授(同)は、歴史社会学など。寶月 誠教授(社会人間学)は、社会的相互作用の理論、逸脱行動論など。菅 康弘助手は、社会学史とくにデュルケム。吉田 純助手は、現代ドイツの社会学説と思想との関連の研究。

○宗教学 長谷正當教授は、フランス・スピリチュアリズム、フランス実存現象学、解釈学など。仲原 孝助手は、カント、ハイデッガーの哲学。

○仏教学 御牧克己助教授は、後期インド仏教思想、チベット仏教思想など。

○キリスト教学 水垣 渉教授は、新約学、古代キリスト教思想など。

以上は概略であり、各教官の著書・論文等を、



紙幅の制約のため紹介しえないのを遺憾とする。

哲学科各研究室に事務局を置いて刊行されている学術誌も多く、哲学科全教授・助教授らを委員とする京都哲学会の『哲学研究』を始め、十余種を数える。

最近では、時代の要請に応えるため、科学哲学、日本思想史学等の講座の新設への要望も強い。また、第4の学科たるべき文化行動学科の設置計画と関連しての新たな発展も期待される。

(文学部)

保健コーナー

国際交流と輸入感染症

多くの学生が休暇を利用して、海外のかなり未開拓な地域に入り込んで帰国したり、あるいは諸外国からの留学生や学者の数が大学内で増えると、わが国では珍しい疾患に罹患して、保健診療所を訪れるケースが最近目立つようになった。

従って、法定伝染病や、対応に困るような病気に遭遇する機会が、医療従事者のみならず大学関係者にも多くなると考えられるので、目ぼしい病気について簡単にふれてみたい。

1) 肺結核；わが国では現在でも決して少ない疾患であるが、留学生の健康診断時胸部X線写真をみて驚くほど新鮮な感染例を経験することがある。自覚症状が乏しく、自分は病気ではないと主張して困ることも珍しくない。わが国の結核による人口10万対死亡率を見ると、1988年で3.2であり、欧米(0.3~1.5)に比較して高い。ちなみに東南アジア諸国では6~7である。

2) マラリア；第二次世界大戦直後は、南方からの引揚者に多くみられ、年配の人には馴染みがある病気である。世界保健機関(WHO)の報告によれば、1987年の年間患者発生数は500万人をこえ、世界中では約2億の患者がいるといわれている。しかし実態はもっと多くの患者がいるともいわれている。旅馴れた人は日本を出発する前に、予防薬を入手しているようであるが、治療薬の日本での製造はなされていない。昨年経験した学生のケースでは、予防薬を服用していたにもかかわらず、帰国後に発症した。

3) 検疫伝染病及び法定伝染病；検疫伝染病にはコレラ、黄熱病、ペストの3種類がある。法定伝染病にはコレラ、腸チフス、赤痢、アメーバ赤痢など合計11疾患がある。最近増えているのはコレラ、赤痢、アメーバ赤痢である。ここ数年私達が把握している範囲でも、京大の学生で法定伝染

病に罹患する人数は、年間2, 3人はいるが、実態はもう少し多いかもしれない。アメーバ赤痢は熱帯、亜熱帯地方を中心に広く世界に分布している原虫症であり、世界中で約5億の患者がいると推定されており、年間数万人の死亡者がいる。この疾患が注目されている理由は、STD(性行為感染症)やホモセクシャルによる感染が多いということがわかっているからである。

4) ウイルス性肝炎；A型肝炎、B型肝炎、非A非B型肝炎などが含まれるが、海外渡航からの帰国後に発症する肝炎を輸入肝炎と呼び、その約80%はA型肝炎である。B型肝炎ウイルスの感染頻度は、アジア、アフリカで5~15%と高率で、わが国では1~2%である。渡航前にワクチンやγグロブリンなどによる予防措置が有効である。非A非B型肝炎のウイルスは一種類ではないという説もあるが、発見も間近く、ワクチンの開発が待たれる。

5) 旅行者下痢症；院生で海外旅行から帰って原因不明の下痢に悩まされ、いろいろ調べた結果、カンピロバクターの感染による大腸炎であったケースがあった。ランブル鞭毛虫という原虫による場合も比較的多いとされている。旅行などで体力が弱ったり、新しい病原体や寄生虫にたいする免疫力、抵抗力が弱い場合は自然回復が遅れる。

6) エイズ；WHOは、世界のエイズ患者は1990年4月末で254,078人と発表している。日本では189人が厚生省のエイズサーベイランス委員会から報告されている。欧米の人はエイズに感染していることを自己申告してくれるので助かる。

以上、海外渡航、留学生の増加にともなう輸入感染症について述べてきたが、一方で、外国からの生鮮食料品によってこれらの疾患に罹患したり、輸入ペット動物による寄生虫の感染などで増えているようなので、注意が必要である。例えば輸入ドジョウから感染する顎口虫症などが知られている。

(保健診療所 森下玲児)

